アイデンティティの再肯定*
―― アジアを旅する日本人バックパッカーの「自分探し」の帰結 ――

大　野　哲　也**

1．問題の所在

1989年、ベルリンの壁が崩壊し東西冷戦が終結することによって、資本主義的経済システムは世界の覇者となった。そして、資本主義の精神が世界の隅々にまで行きわたる、いわゆるグローバリゼーションの過程でダイナミックに進行する人、モノ、資金、情報などの流動化現象は、日常の生を営む個々人に、アイデンティティに自覚的にならざるを得ない状況を生み出している。

競争原理によって、あらゆる商品群や選択肢が眼前に提示されているとき、私がどれを選択するかは、私の自由な意思に一任されている。このような、負荷から完全に解き放たれ「私」が最大限に尊重されている状況は心地よいかもしれないが、それは常に「私は今、何を欲しているのか」「私は今、どうするべきなのか」を問われ、決断しなければならないことをも意味している。近年、日常的に見聞きするようになった「自分探し」ということばは、これらの問いを常時突き付けられているゆえに、個々人の興味関心が自己の内面へと内旋していく様子をみごとに表現している。

すなわち現代社会は、常にアイデンティティに自覚的であることを要求されている社会でもあるわけだが、このアイデンティティを山路勝彦は「蜉蝣」や「陽炎」のようなものだと喝破している（山路 1998：15–53）。強固で不変的なアイデンティティがあるわけではなく、その場の状況にあわせた、暫定的で可変的なポジションがあるだけだという山路の指摘は、「本当の自分」を掴んだと思った瞬間にするりと手から零れおちていくような、アイデンティティの掴みどころのない性質を適切に形容している。

このような、確たるアイデンティティなどけっして手にすることなどできないのに、それを欲し、葛藤する状況において、ある者は「自分探し」の手段として、ボランティアや自己啓発セミナーなどに身を投じていった（武田 1999）。また、別の者は、バックパッキングという観光実践を「発見」し、これに熱中していった。

バックパッキングとは、イスラエルの社会学者・人類学者エリック・コーエンによれば、「非制度化された形態の観光（The noninstitutionalized forms of tourism）」であり、それはマス・ツーリズムなどの「制度化された形態の観光（The institutionalized forms of tourism）」の対極にある（Cohen 1972：165–182）。1970年代には、まだ「バックパッカー」という名称は生まれておらず、コーエンはそのような旅を実践する者を「漂流者（The drifter）」（Cohen 1972：165–182）や「遊動者（Nomads）」（Cohen 1973：89–103）と表現しているのだが[1]、具体的に思い浮かぶバックパッキングのイメージは、①長期間、②最低限の予算で、③いきあたりばったりに、④路線バスなどの交通手段を使い現地の日常生活に埋もれながら移動していく、というものだろうか[2]。

バックパッキングという「観光」がなぜ「自分

*キーワード：バックパッキング、アイデンティティ、再肯定
**立命館大学非常勤講師

1）コーエンの分析後、このような旅人は「放浪者（wanderers）」（Vogt 1976：25–41）、「徒歩旅行する若者（tramping youth）」（Adler 1985：335–354）、「国際的な長期節約旅行者（international long term budget travelers）」（Riley 1988：313–328）などと表現されてきたものの、現在では総称として「バックパッカー（Backpacker）」が使われている（Uriely, Yonay, Simchai 2002：520–538）。

2）この４つの条件は、日本で初めてのバックパッキング用ガイドブック『地球の歩き方』の第１号『地球の歩き方

探し」に繋がるのか、いっけん奇異に思うかもしれない。しかしアイデンティティが「他の誰でもない」という差異化の果てに残余として実感できるものならば（Boon 1982：229–237）、多様な差異（＝異文化）を長期間にわたって濃密に経験するというバックパッキングは、まさにアイデンティティの実感実践そのものだといえるだろう。

たとえばイギリスの地理学者リューク・デフォルジュがおこなったインタビュー調査では、「多く（many of those）」のバックパッカーから「自分探し（when self-identity is open to question）」という動機が語られた。そこから、旅を、帰属社会からの離脱と復帰というサイクルのなかでおこなわれる、アイデンティティ変換のモーメントとしてとらえたデフォルジュは、南米を旅した女性の語りを引用しながら、旅における「冒険」や「差異」という経験は、旅に出る前に保持していた「主婦」や「妻」というアイデンティティから、「新しい個人化されたアイデンティティ（new individualized identity）」へ刷新させると主張した（Desforges 2000：926–945）。

また、文化交流学の立場から日本人バックパッカーを調査した斉藤聖二も、快楽、痛み、苦悩を感じながら異文化と接触することで自分の居場所を見直し、人生と正面から向き合うことこそがバックパッキングの醍醐味であり、そのような機会を経ることによって「必ず新たな地平が付け加えられる」と主張し、バックパッキングによるアイデンティティの刷新に肯定的立場を表明している（斉藤 2003：26–43）。

このように、現在のバックパッキング研究においては、旅におけるアイデンティティの変換可能性を高く評価することが主流となっているのだが、本稿では、この言説を根本的に問い直してみたい。というのも、筆者のアジアにおけるフィールドワークからは[3]、彼らが、アイデンティティの刷新を願って旅を実践したにもかかわらず、旅の帰結において、彼らは変わったというよりも、むしろ既存のアイデンティティを再確認・再強化させたというアイロニカルな状況が生じているように思われるからだ。

このような筆者の「実感」を出発点として、本稿では、バックパッキングにおけるアイデンティティの刷新について、再吟味してみたい。それによって、山路がいう「蜉蝣」「陽炎」のような掴みどころがないアイデンティティという幻影が、わずかに一部分ではあるが、明確な形で浮かび上がることだろう。

2．先行研究の検討

では、バックパッキングは旅人に、どのようなアイデンティティを付与するのだろうか。その問いに答えたのが、スウェーデンの社会学者トルン・エルスルッドだった。エルスルッドによれば、バックパッキングにおける「リスク」や「冒険」的な経験によって、バックパッカーは「エキサイティング・パーソン（exciting person）」「独立独歩（self-reliant）」「パワフル（powerful）」「ストロング（strong）」というようなアイデンティティを獲得したと実感する傾向があるという。しかもそのような「肯定」的自画像の獲得は、「自分探し」の葛藤の解消だけにとどまらず、社会的な資本への転換可能性をも内包しているという。なぜ

2 アメリカ』（ダイヤモンド・スチューデント友の会 1979）で挙げられたものである。ただ現在では、バックパッカー人口の増加にともなって、高級ホテルに宿泊したり、パソコンを携帯し情報を発信しながら旅をするなど、多様なバックパッカーが出現してきており、「バックパッカー」を明確に定義することができなくなっている。なお『地球の歩き方』をはじめとするバックパッキング用ガイドブックの分析や、バックパッカーの定義については大野（2010）を参照のこと。

3）本論文は、筆者がアジア諸国で行なったフィールドワークに基づいている。海外での調査は、2004年10月から09年９月にかけて、タイ、ラオス、ベトナム、カンボジア、中国、ネパールで行なった。また日本では、04年３月から10年８月まで、継続的に「現役」と「元」バックパッカーにインタビュー調査を実施した。アジア各地のフィールドでは、日本人バックパッカー、ゲストハウス、旅行代理店、両替商、レストラン、観光局、日本大使館などへの聞き取りをはじめ、筆者が実際にバックパッキングをしながら「秘境ツアー」に参加したり、日本人バックパッカーと宿での生活や旅を共にするなどしてデータを収集した。調査期間中に出会い、会話をした日本人バックパッカーは100名を超えるが、聞き取りをデータとしてフィールドノートに記したのは、男性30名、女性11名である。

なら、このような性質のアイデンティティは、現代資本主義システムの「強い者が勝ち、弱い者が負ける」という根本原理に適合的だからである。実際、そのことを熟知しているバックパッカーは、旅を終えて帰国し就職活動をする際にも、旅の経験を活用することがある（Elsrud 2001：597–617）。

これらの先行研究を踏まえたうえで、イスラエルのユニークな学際的研究者カイム・ノイは、バックパッカー同士のコミュニケーションに着目し、「自己変革（self-change）」についての理論的枠組みを具体的に提示した（Noy 2004：78–102）。ノイは語りの分析から、これまで「独立独歩」だとされていたバックパッカーが、実はバックパッカー同士の会話をとおして交換される情報に依拠して旅を遂行していることを明らかにした。現代のバックパッキングは、旅人同士のコミュニケーションで成立している相互依存的な旅だというのである。そのうえで、各人が旅で経験する「真正性」（MacCannell 1974：589–603）を「自己にとっての真正性」に読み替えることによって、エルスルッドが主張した特性と同質の、「積極的（positive）」「パワフル（powerful）」「率直（openness）」「辛抱強い（tolerant）」「忍耐強い（patience）」アイデンティティを獲得すると主張した。

真正性の読み替えはノイの主張のポイントなので、説明が必要だろう。ノイによれば、バックパッキングの旅は徐々に、マス・ツーリズムと同様に、商品化されてきている[4)]。そのような状況下で、バックパッカーが、たとえばツアー会社が催行するトレッキングに参加した場合を考えてみよう。トレッキング・ツアー自体はすでに商品化されたものである。そこで経験する「少数民族」との出会いやエレファント・ライド（ゾウに乗る体験）というような異文化体験は、あらかじめツアー会社によってお膳立てされたものだ。したがって、ツアーで経験することは、偶発的でもなければ一回性の出来事でもないので、私だけの真正な経験であるとは主張し難い。しかしながら、私が自分の足で歩き、疲労困憊したこと、私が「少数民族」と出会い、驚いたこと、私がゾウに乗り、興奮したことは、私にとってはまぎれもない真実である。つまり、現代のバックパッカーは、遭遇する出来事の偶然性や一回性に経験の真正性を求めるのではなく、自らの経験と実感に真正性の基点を置くというのだ。これが、ノイいう「経験の真正性」から「自己にとっての真正性」への読み替えである。

さらにノイは、自己にとっての真正性を実感することによってアイデンティティが刷新され、旅によって自己変革したという語りがコミュニケーションを通じて伝達・流布されることによって、自己変革を望むバックパッカー予備軍が旅に駆り立てられると述べる。すなわちノイは、バックパッカーが再生産されるサイクルを、「自己にとっての真正な経験」に基点を置きながら、「アイデンティティの刷新」と「コミュニケーション」をキーワードにして具体的に提示したのである【図１】。

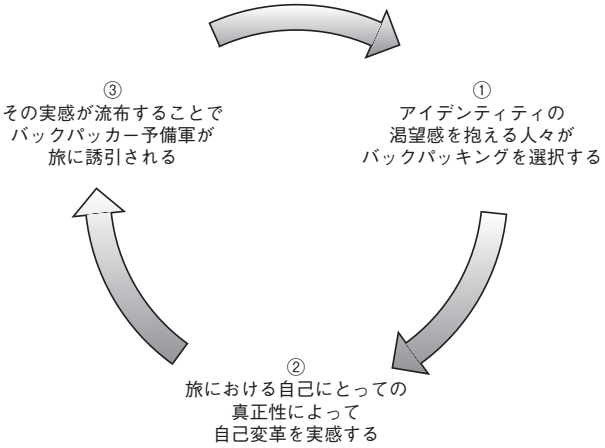

図１　バックパッカーの再生産サイクル

4）異文化を商品化するマス・ツーリズムによって発展を遂げてきた観光産業であるが、ホスト社会に過大な負荷をかけてしまう観光システムに対する批判が1970年代から起こってきた。そのような状況下で、新たな観光形態として注目されたのがマス・ツーリズムの対極に位置する、個化された旅の形態であるバックパッキングだった。放浪しながら現地の生の文化を味わうことに面白さを見出しているバックパッキングは、ホスト社会に文化や自然の商品化を求めないからである。しかし、バックパッカーが増加することで、バックパッキングが、徐々にマス・ツーリズム化されてきているという指摘が近年されている。現在のバックパッキングがどのように商品化されているのかについては、大野（2007：268–285、2010）で詳しく論じている。

3．バックパッキングを要請する社会背景

これらの先行研究に加えて、日本の場合は、そのような個性豊かなアイデンティティを若者たちに要請する独自の社会背景があった。ここではそれを、若者たちの生き方に直接影響を与える経済環境と教育環境に絞って確認しておこう。

戦後、焦土と化した日本社会が西側諸国と対等な経済力を身につけるまでには、時間はかからなかった。『経済白書』が「もはや『戦後』ではない」（経済企画庁 1956：42）と高らかに宣言したのは1956年、終戦からわずか11年後のことであり、その後に続く高度経済成長は「東洋の奇跡」とさえ呼ばれた。そして人文・社会科学の諸分野では、このような驚異的な経済成長を支えた要因の一つが、日本社会における支配的な価値観にあったという指摘が繰り返しなされてきた。

教育社会学者の竹内洋は、この価値観を「立身出世主義」（竹内 1995）と呼んだが、それは「皆が社長を目指す」というような単純な社会的上昇志向を指しているのではない。そうではなく、勤勉、孝行、忍従というような日本人の美徳観や道徳観と、「成功という華麗な物語」と「零落の不安という強迫固定観念」を内包する「フォークセオリーとしての社会ダーウィニズム」が結合したところからうまれてきた「自己成長物語」のことをいう。つまり、自分らしさのサクセス・ストーリーだ。竹内は、そのような価値観が、今日の日本の経済的発展に大きく寄与したと指摘したのである（竹内 2005）。

人類学者の中根千枝が「刻苦勉励型」（中根 1967）、宗教社会学者の大村英昭が「禁欲的頑張る主義」（大村 1997）と呼んだこの価値観を、家族社会学者の山田昌弘は「自己実現」（山田 2004：33）と命名した。山田は、現代日本社会においては、自分の「よりよい状態」を目指して選択・努力することが「よいこと」であるというコンセンサスがあると指摘し、自らの意思で選択し自分で思い描いた状態を実現することを「自己実現」と定義したのである（山田 2004：33）。

山田のいう「自己実現」的価値観は、特に高度経済成長期に、企業においては生涯にわたって賃金と身分が安定的に上昇していく「終身雇用」や「年功序列」などの日本的雇用形態の基幹として具現化していった。すなわち「中卒であろうが大学院卒であろうが、仕事で高い能力を示そうが仕事を覚えるスピードが遅かろうが、係長止まりであろうが、社長まで到達しようが、『企業内で昇進し、給料が高くなる』という点では、質的な差がなかった。とにかく自分の置かれた立場で一生懸命働いてその人なりの業績を上げれば、地位が上がり、収入が増大することが期待」（山田 2004：79）できる制度として、日本社会で定着していったというのである。

ところが高度経済成長期が終焉し、1980年代に突如起こったバブル景気を経て、東西冷戦が終わりを告げた90年代に入ると、サッチャリズムやレーガノミクスと呼ばれる新自由主義のグローバル化が一気に進み、日本的経営術は大きな見直しを迫られることになった[5)]。

たとえば、企業の雇用形態は、それまでの「終身雇用」と「年功序列」のワンセットから、「長期蓄積能力活用型」「高度専門知識活用型」「雇用柔軟型」へと三分化したうえで、国際競争力を高めるために「雇用柔軟型」をより重視する形態へとシフトしていった。もちろん「雇用柔軟型」とは、企業が必要な時に必要なだけの人材を雇うことができるシステムであり、具体的には、フリーターを最大限に活用した経営手法を指している。

一方、それと同時に教育現場でも、新自由主義と思想的親和性の高い「個性の重視」と「個性の伸長」を尊重する教育方針へと大きく舵を切り、それまでの集団性を優先する画一的教育からの脱皮を果たしていったという指摘がある。たとえば、教育学者の市川昭午は「80年代後半から90年

5）当時の日本の首相中曽根康弘もまた、イギリスの首相マーガレット・サッチャーやアメリカ合衆国大統領ロナルド・レーガンと同様に新自由主義を強く支持する政治家の一人であった。日本における新自由主義は、日本専売公社、国鉄、日本電電公社の三公社の民営化を断行した中曽根内閣以降も小泉内閣や安倍内閣へと継承され、郵政民営化や規制緩和が大胆に進められていった。こうして、政治、経済、教育の総合的な構造改革を推進することによって、日本社会は新自由主義社会へと大きく舵を切ったのである。

代前半にかけて人々の精神や思考様式にも大きな転換が見られた。特に目立ったのは剥き出しの個人的欲望の解放、権威や秩序の否定などであった」（市川 2002：10）と20世紀後半の日本における人々の志向性を分析したうえで、「90年代の教育改革は教育主導の社会改革ではなく、社会変化への対応としての教育改革」（市川 2002：11）だったと断言した。その市川が、教育改革の核心として指摘したのが、「個を生かす」「生きる力」などのスローガンに象徴される個性主義だったのである（市川 2002：5-20）。新自由主義を肯定する社会がまずあって、その社会に適合的な教育として、個性主義という価値観が教育現場に導入され推進されたというのである。

市川と同じ立場をとる社会学者の石川准も、戦後50年間続いた規律・訓練的な画一的教育方針が成立しなくなった1990年代に、「役に立つ従順な個人をつくりだす学校から自分の可能性を追求する個人をつくりだす学校へ」と教育方針の転換がなされたことを強調している（石川 2001：105-124）。そして石川が、このような教育方針の方向転換の根本要因に挙げるのは、やはり市川と同様、産業構造の変化なのである。

これら経済と教育の大改革によって、人々、特に若者の思考は大きく変化し、集団という枠組みをまず尊重しそのなかで「自己実現」を貫くのではなく、自らの人生観にしたがって「自分らしく生きる」ことを第一義とする生き方が社会的に「正しい」こととして定着していった。だからこそ「自己責任」論がいかなるときも絶対的真理として主張されるのである。日本社会では美徳とされてきた「自己実現」を拒否して、自分らしさを最優先させるという個人の思考変化は、そのような生き方の象徴とさえいわれたフリーターの数が、1982年の59万人から92年には110万人、そして2001年には206万人へと変化する数字からも理解できる（小杉 2004）。この数字には、経済的な安定や社会的地位の上昇を第一義とする「自己実現」よりも、「自分らしさ」を最優先させる若者の生き方がみごとに現出している。

ところが2000年代に入ると、旧来の「学校を卒業したら就職して定年まで勤め上げる」というような日本的価値観に縛られることなく、自分らしく生きるという選択は、実はそれが従来の日本的経営術から新自由主義へと、産業構造の鞍替えがおこなわれただけで、結局は日本社会のメインストリームに再包摂されただけだったことが暴露されていった。自分らしさを確保するために、あえて選択したフリーター的な自由な地位は、実は、新自由主義的経済システムの最下層を構成する必要不可欠なパーツにすぎず、自分らしく生きるという選択は、ともすれば「勝ち組」を下支えする「下流社会」（三浦 2005）への転落を意味してもいた。こうして新しい時代を切り開くはずの能力主義は見直しを余儀なくされ、自分らしさを希求してあえて不安定な位置に留まるというフリーター的な生き方は、今や貧困層のシンボルと化し、日本社会は再び大きな転換期を迎えている。

このように世界情勢に合わせながら、企業は日本的な経営手法から新自由主義的システムへ、また教育現場では集団性を重んじる方針から個性を伸ばす方針へ、というようにドラスティックに変化していき、それにともなって日本社会自体も大きく変貌していった。その社会変動の過程で、人々の生き方の志向性やライフスタイルも変化していったのである。

こうした不安定な時代を背景にして、フリーター的生き方を選択した者は、たとえば、趣味への没頭、留学、農山漁村への移住など、現代社会の多様化した生き方の選択肢のなかから、もっとも自分らしく生きられる方法を見つけ、選択していった。そしてそのような者のなかで「外」へ出かけることに楽しみを覚え、冒険的な経験が自分の人生には意味があると思った者がバックパッキングという実践を「発見」し、それに身を投じていったのである。

その理由の一つは、先行研究が指摘しているように、バックパッキングによって、先の読めない不安定な社会をも生き抜いていける個性豊かで「強い」アイデンティティが獲得できるからだろう。劇的な変化の途上にあるからこそ、その変化に対応できるアイデンティティを欲する人々が現れ、そのなかの一部の人々が、バックパッキングを選択するという回路がそこには見える。いっけん自由でランダムな個々人の選択も、実は社会のあり方や情勢の変化に強く影響を受けているので

ある。

4．ある日本人バックパッカーの「自分探し」の経験

では、彼らは、いかにして旅で自己変革を実感するのだろうか。以下では、そのメカニズムを彼らの語りから具体的に探っていこう。

まず、ある一人のバックパッカーに焦点を絞り、彼の、旅に出た動機、旅の経験、自己変革の実感、これからの人生の目標などを追ってみたい。

私とガク（1981年生まれ／男性。敬称略。以下同じ）は、2004年11月に、タイ・バンコクのバックパッカーズ・タウンであるカオサン【写真１】の有名な日本人宿カオサン・トラベラーズ・ロッジ【写真２】で知り合った。2004年９月に日本を出発したガクは、インドネシア、シンガポール、マレーシア、タイ、カンボジア、ベトナムの６カ国を放浪してきたと語っていた。

ガクはサチコ（1980年生まれ／女性）という女性と一緒に旅をしていた。とはいえサチコと付き合っているわけではなく、旅の初心者同士が旅の途中で出合い、意気投合して、当面の目的地が同じだということで一時的に行動を共にしているらしかった。

ガクはほぼ毎日、サチコとバンコク周辺の観光地へ遊びに行っていた。私は、その表情から心底旅を満喫していることがよくわかる、快活な体育会系の彼に旅の話を聞きたいとずっと思っていて、その機会を待っていた。しかし、ガクが常にサチコと一緒にいて楽しそうにしているので、邪魔をしてはいけないという思いが先に立ち、私のカオサン滞在中は、彼とは他愛もない雑談しかできなかった。

その後、私はバンコクを出て北上し、タイ北部チェンコンからラオスに入り、ルアンパバーン（世界遺産）やビエンチャンなどを経由して、ベトナムのフエから南下してニャチャンまで移動したのだが、ニャチャンの日本人宿で偶然に、ガクと再会したのである。ガクに聞いてみると、彼は、私とは逆回りのコースをたどってニャチャンまで旅をしてきていた。すなわち、バンコクから南東に進み、カンボジアのシェムリアプ（アンコールワット観光の拠点）やプノンペンなどを回ったあと、ベトナムに入って北上してきたのである。ちなみに、バンコクからカンボジア、ベトナム、ラオスを巡り再びバンコクに戻ってくるこの周遊コースは（逆のコースも同様）、日本人バックパッカーから絶大な支持を受けているガイドブック『旅行人ノート３メコンの国』（旅行人編集室 1996）が推奨しているルートでもある【図２】。

ニャチャンで再会したガクは、すでにサチコとは別れており、別の男性（日本人バックパッカー）と一緒に行動をしていた。聞けば、サチコ

写真１　バンコク・カオサン

世界最大のバックパッカーズ・タウンであるカオサンには世界各国からバックパッカーが集結する。ここはタイ国内の旅だけでなく、アジアの旅のハブ的な役割を担っている。2005年７月22日、筆者撮影。

写真２　カオサン・トラベラーズ・ロッジ

ガクと出会った宿は、宿泊客のほぼ全員が日本人バックパッカーで、常時、満員だった。しかし宿は、日本人経営者の日本への帰国にともなって、2008年に営業を終えた。この写真は、４階の男女兼用ドミトリー（１泊100バーツ。約270円）。2005年７月22日、筆者撮影。

図 2　東南アジアの概略図

とは、カンボジアからベトナム・ホーチミンまで一緒だったという。だが、そこでサチコから「一人旅がしたい」と突然言われて、別行動をとることになった。ガクは詳しく語らなかったが、話の前後から、サチコは、「せっかくバックパッキングをしているのだから、ガクに頼っていては本末転倒になる」と思ったらしい。行動を共にするうちにサチコに仄かな想いを抱くようになっていたガクは、彼女と別れることは本意ではなかったのだが、また再会できるはずだと自分を納得させて、彼女の希望を受け入れたという。こうした、異郷の地における偶然の出会い（と別れ）も旅の大きな魅力なのだろう。

このような会話をガクと交わしているうちに、彼は、日本でどのような生活をしていたのか、そしてどのような理由で旅を始めたのかを語ってくれたのである。

元コックであるガクは、調理の専門学校を卒業して以来、フレンチ、無国籍、イタリアン・レストランで修行しながら、自分のレストランを持つという夢に向かってまい進していた。その彼が店を辞めて旅に出たのは、人生を揺るがすほどの大きな挫折感を味わったからだった。

> ヘルニアの手術を受けて、会社に戻ったんですけど、体が思うように動かない。腰がやっぱりだめで。それで、仕方ないから仕事を辞めたんですけど、もう絶望というか。ガーンって感じで。「俺これからどうやって生きていこう」みたいな。もう一生、料理の世界は無理かなって思ったんですよ。だからいわゆる「自分探し」ってやつですよ。（聞き取りは2004年11月、ベトナム・ニャチャン。以下同じ）

幼いころから一貫して料理人になることを目標にしてきたガクだったが、病気によって長年の夢を断念せざるを得なくなってしまった。その彼が、失意のどん底で選択したのがバックパッキングだったのである。

> これからの人生をどうしようっていろいろ悩んだんですけど、一回チャラにするっていうか、清算するっていうか。旅に出て、一回自分とちゃんと向き合おうってほんとに思ったんっすよ。日本にいたら、アルバイトしたりしないと生活できないし、家にいたら親もいるでしょ。俺は一人になって、自分に向き合うっていう時間が必要だって思ったんですよ。

病気になったから旅に出るという、他者からすれば突飛とも思えるアイデアの飛躍も、「『自分探し』界のカリスマ」（速水 2008：61）とさえ言われているバックパッカーの高橋歩[6]の熱烈なファンだったガクにとっては当然ともいえる選択だった。自分らしさに葛藤する若者に対して、自らの世界一周の旅や生の軌跡をとおして「俺はどこか

6）高橋は1972年生まれ。男性。20歳の時に大学を中退して飲食店を経営した。その後店をやめて、自叙伝を出すために出版社を立ち上げた。26歳で結婚し、出版社の経営から退いて夫婦で２年間の世界一周旅行をした。帰国すると沖縄に移住しゲストハウスをオープンすると同時に、新たな出版社や飲食店を立ち上げた。自由奔放に自らの「やりたいこと」だけを徹底的にやり続ける彼の信奉者は多い。

ら来て、どこへ向かうんだろう。あれから20年。…タカハシアユムという生命が辿り着ける限界いっぱいまで、成長し続けていきたい」（高橋2005：21）、「世界を旅しながらシンプルに気持ち良く生きている人たちに出遭っていくうちに、『俺は、ずいぶんと人生に必要じゃない荷物を背負っているなぁ』って感じたよ。やっぱり、俺も、多くのものを守ろうとするんじゃなくて、潔く、本当に大切なものだけを選んで、それを深く愛していきたいな、って思うようになってきたんだ」（高橋 2006：205）など、旅による自己成長、自己変革の実感と、既成の価値観にとらわれることなく、自らの意思で自由自在に生き続ける自己の姿を発信し続ける高橋は、多くの若者から絶大な支持を受けているのである。落ち込むたびに高橋の熱い言葉に励まされ続けていたガクは、己の夢が断たれて路頭に迷った瞬間に、高橋のどこまでもポジティブな生き方に自らの姿を投射し旅の決意をしたというのである。

旅に出たことなんか一度もないのに。しかも海外一人旅。よっしゃ、やったれーって。

しかし当然のことながら、彼の決断は周囲のすべての人たちから祝福されるものではなかった。特に母親からは「（今の仕事を）辞めてどうするの？どこの会社も一緒。一つのところで真面目にずっと働きなさい。旅に出たって帰ってきたらどうするつもり？」と堅実で安定的な人生を歩むように強く説得されたという。

悩むっていうか、いろいろ考えたっていうか。それを聞いて、「じゃ、旅はやめた」とはならなかったですけどね。

こうしてガクの東南アジアにおける「自分探し」の旅は始まった。彼は徹頭徹尾ガイドブックを後追いしていくというスタイルをとっていたが、それでも旅は十分刺激的だった。そして旅をするうちに、少しずつものの見方や考え方が変わっていったという。

屋台なんかでメシ食ってると、子どもが「お金ちょうだい」って来るじゃないですか。インドネシアではかわいそうって思って金やってたんですよ。けど、一人にあげるとそいつが「あいつは金くれるぞ」ってほかのガキにいって、みんなが俺に金せびりに来ることになって。めちゃくちゃ腹が立って、それ以来、俺、めちゃめちゃ冷たいっすよ。

ストリート・チルドレンを見て素朴に「かわいそう」だと思い、援助の手を差し伸べるというガクにとっては「人間として当然」の感情は、こうしてみごとに裏切られた。彼の固定化されていた観念や価値観は、このような経験を重ねていくうちに変化していった。彼にとってそれは「目からウロコがぼろぼろ」落ちるような経験の連続だった。

旅は、日本にいたんじゃ、まず出会えねえって人に出会えるでしょ。それがもう、たまんないっすよ。アチェでは、現地の人と一緒に戦争したっていう日本人にも会ったし、バンコクでは沈没[7]しながら職探ししてる、メグ姉さん。ハッパとオンナ（筆者注：マリファナと買春）一筋っていうハッパのタカさん。ハッパ、ハッパ、オンナ、オンナ、ハッパ、ハッパ、ハッパみたいな。落ちるところまで落ちてるねえ。崩れちゃったねえ。初対面の俺にいきなり自分のパンツ洗わせるキョウコちゃん。もう、ありえねえでしょ、日本じゃ。そういう人たちとの出会いっていうのかな。そういうのが一つひとつ自分のなかに積み重なっていってて、それが自分を少しずつ成長させていってるっていうか、変えていってくれてるというか。

旅の目的の一つが「自分探し」であるならば、「成長させていってる」「変えていってくれてる」

7）「沈没」はバックパッカー用語であり、病気療養というような特段の理由がないのに、一つの町で長期間滞在し続けてしまうこと。「長期間」がどのくらいの日数を指すのかは個々によって違うが、ときには数カ月間に及ぶこともある。

という自己の成長や変革の感覚こそ、ガクが渇望していた実感であるだろう。彼は、そのような変化は、異なった価値観との連続的接触によってもたらされたと自己分析した。現地の「真正」な文化に浸ることがバックパッキングの神髄であるならば、ガクの自己変革のプロセスはバックパッキングの真正な体現であるといってよい。

このような非日常的な経験を重ねるうちに、ガクは自分なりの「自分探し」の答えを見出していったのである。

> 俺、旅に出て、これから先、「やりたいこと」っていうのが少しずつ見えてきたんです。俺、日本でもお菓子とかデザートとか、そういうの作るの結構好きで、それに東南アジアの小物類とか結構いいでしょ。だから自宅にガレージがあるから、そこを改造して「雑貨＆カフェ」をやりたいんですよ。

ガクが経験した商品化されたバックパッキングにおける自己変革のプロセスは、中国の社会学者ニン・ワンが指摘した「真正性の産業」（Wang 2000：71）化ともいうべきものであるだろう。ワンによれば、現代では「アクティビティ」や「文化」というようなものだけにとどまらず、個人の内面にまで迫る「経験」までもがホスト側によって産業化の対象にされているという（Wang 2000：217–219）。行為の選択権は常にバックパッカー側が握っていると彼ら自身に思わせる観光システムを構築することで、「非日常的な経験」の主体性と真正性がバックパッカーに担保され、それによって自己変革の実感が付与されているのである。一方、バックパッカーの側からすれば、自らの経験までもが「産業化」されつつあるとは想像だにしていないかもしれない。なぜならその行為を選択したのは自分自身であり、それによって自分自身が驚いたり楽しんだり感動した実感は、まぎれもない真実だからである。

旅のルート、移動手段、宿泊場所など、あらゆる要素を、ガイドブックに完全に依存しているガクは、自分が商品化された旅を消費していることには自覚的であるが、しかしそのような旅であってもなお、彼は変革していく自己を強烈に実感しそれを語っているのである。このような自己変革プロセスは、まさにノイが指摘した「自己にとっての真正性」の回路そのものである。

> 俺の高校、卒業するとほとんどの奴が就職したんっすけど、そいつらって、すでに会社に入って５年ぐらい過ぎてて。そうすると安定っていうか、ある程度先が見えるというか。仕事して、結婚して、子どもができて、家建てて、出世して。あくまで右肩上がりで。ま、それが、どのくらいの角度かっていうのはあるにしろ。俺も就職して同じように一度は歩んだんだけど、腰をヘルニアやって一回ドーンと挫折ちゅーか、落っこちて。けど、「今に見とれ。ガーンとお前ら追い越したるわい」っていうのがすごくあるんですよ。

ガクが旅で経験した自己変革のプロセスは、ガクに当面の「ハッピーエンド」をもたらした。こうして一度は、挫折し人生の路頭に迷いもがいていたガクは、旅によって新たな人生の目標を見つけることさえできた。旅によって彼は、自己変革の実感だけにとどまらず、大きな自信を持つまでに、みごとに再生したのである。

2007年２月、私はバンコク・カオサンの日本人宿カオサン・トラベラーズ・ロッジで偶然サチコと再会を果たした。04年にガクと一緒に旅をしていたサチコは、ガクと別れたあとも、ずっと一人旅を続けていたという。そのサチコが、ガクが東南アジアの旅を終えて帰国して、東京の飲食店で働いていると教えてくれた。旅の「その後」や、彼が現在旅をどのように総括しているのかを聞きたかった私は、調査を終えて帰国してすぐに、ガクにメールを出した（サチコがメールアドレスを教えてくれた）。

ガクはすぐに返事をくれた。約３年ぶりだったにもかかわらず、ガクは私のことを、ニャチャンでの長い会話も含めてちゃんと覚えてくれていた。しかしガクは、私との再会をはぐらかすように拒否した。そして３度ほどメールをやりとりしたあと、彼からの返信はぷっつりと途絶えた。私には、ガクの旅がどのような結末を迎え、日本に

帰国してからどのような経緯で今の仕事を選んだのかということについて、想像がつかない。しかし彼の私を拒絶するような反応に、私はガクの、旅で解決されたと思ったが実際には何の解決もされてはいなかった深い悩みや葛藤を垣間見たような気がして、それ以来、ガクには連絡できなくなってしまった。

5．「自分探し」の帰結

ガクが語った自己成長のプロセスは決して彼だけの特殊な経験ではなく、バックパッカーの自己変革の過程には同じメカニズムが働いている。「自分探し」の旅の内実は、経験の均質化という意味で、きわめて類似しているのだ。表現に差異はあるが、旅のエピソードをアイデンティティの刷新に結び付けていく語り口は共通しているのである。

> 旅は俺を成長させてくれるんですよ。カトマンズで全財産を騙し取られるっていう嫌なこともあったけど、もう全然なんとも思ってないですからね。あれがあったから俺の生きる道がみつかったというか。あと韓国人の女の子のバックパッカーと知り合って、4カ月で別れたんですけど、そういう痛みっていうか。もっと相手のことを考えられる人間になりたいって思いますもん。そういうこと、旅は教えてくれるんっすよ。（ナオ／1977年生まれ／男性。2004年10月、タイ・チェンマイ）

彼らは旅のなかで恋愛をしたり詐欺に遭ったりというような、非日常的な経験を積み重ねていくことで自己変革を実感していく。詐欺や強盗などの情報はガイドブック、口コミ、インターネットなどによって、具体的な事例とともに繰り返し流通している。だがその被害はあとを絶たない。バックパッキングが商品化していても、旅には実際に危険な要素があり、現実にも多くの者が被害に遭っているということが、バックパッキングの冒険性を維持しているのだ。

もちろん被害に遭うことは不愉快であり、後悔や怒りを感じることは間違いない。しかし斉藤が指摘したように、快楽、痛み、苦悩を感じながら人生と正面から向き合うことで、必ず新たな地平が付け加えられる（斉藤 2003：26–43）、という解釈が公認されている空間では、そのような「マイナスの経験」でさえも「プラスの経験」へと転換することが可能となる。そして、何かを経験するたびに経験の断片をリゾーム的に接続して経験の束を作り上げ、それを何度も解釈しなおすことで、さまざまなバリエーションの自己成長物語が重層的に生成されていくのである。旅におけるすべての経験を、自己成長物語という文脈のなかで意味づけていくのだ。このようにして自分らしさのサクセス・ストーリーの束を自動的に紡ぎ上げていくことによって、自己が変革されたという実感が作り上げられていくことになるのである。

ところが、このようにしてバックパッキングでアイデンティティの変革を実感したバックパッカーではあったが、そのような確信の背後では、きわめてアイロニカルな状況が生じていた。

山田のいう「自己実現」（山田 2004：33）を拒否して、自分らしさを最優先する生き方を選択した者に共通するのは「やりたいこと」への強い執着だという（小杉 2004）。そうだとすれば、「やりたいこと」を貫くことで自分らしく生きようとする姿勢は、いっけん、受験、就職活動、昇進試験の時などに嫌というほど味わわされる競争社会のサバイバル・ゲームのプレッシャーから解放されているようにみえる。

しかし、自分らしさを最優先している生き方を模索している若者も、一度は拒否したはずの「自己実現」から完全に解き放たれたわけではなかった。たとえば社会学者の久木元真吾は、フリーターが頻繁に発する「やりたいこと」という言葉を分析して、彼らの心性の特徴を抽出した（久木元 2003：73–89）。それは、①「やりたいこと」ならば続けていける。②「やりたいこと」は今わからなくていい。③「やりたいこと」はきっと見つかる、という3つである。フリーターたちがステレオタイプに語る「やりたいこと」という言葉と、「やりたいこと」が見つかるまではあえて社会的に不安定な位置に甘んじることも辞さないとする彼らの実践は、「自己実現」が充満している

社会に対する彼らなりの異議申し立てだと、いっけんみえるかもしれない。しかし久木元はそうではないと否定したあと、このようなフリーターたちの「やりたいこと」への執着心は、「仕事はすぐやめずに続けるべき」「仕事は没頭するくらいに取り組むべき」という従来から望ましいとされてきた価値観がいまだに温存されている証拠だと主張した（久木元 2003：73-89）。フリーターが展開する「やりたいこと」という論理と、彼らが拒否したはずの「自己実現」は、同じコインの表裏であり、価値観の表現方法が変化しただけだというのである。

久木本と同じ立場に立つ山田は、さらに論を一歩進めて、「自己実現」を拒否し「自分らしさ」を最優先するという若者の意識変化は、不安定な地位を選ばざるを得ないほど追い込まれている状況がまずあって、そのような状況に適応した結果として起こったのであり、若者の意識変化が起こり、その結果としてフリーターが増加したのではないと断言している。彼らの心理的安定と自己正当化のためには「好きでやっている」という言い訳が必要であり、それが自分らしさの強調へとすり替わっているにすぎないというのである（山田 2004：101）。

現代日本社会の若者の、いっけん新たな価値観だと思われていた自分らしさを重視する生き方は、終身雇用制や年功序列制の否定には繋がったが、「自己実現」的価値観という観点からすれば、何の変化もしなかったと久木元と山田は主張する。なぜなら、彼らが依拠する「やりたいこと」の論理にも、「自己実現」的価値観が混入しており、それがこの論理の基礎の一部をなしているからである。「自己実現」を完全拒否して自分らしさにまい進する者も、あるいはまた、新自由主義という冷徹な体制内で、競争に敗れた言い訳として自分らしさを用いる者も、「やりたいこと」の論理に固執し続ける限り、「自己実現」的価値観の呪縛から逃れることはできないというのである。

本論の文脈に沿えば、こういうことになる。経済的な国際競争力を高めることを目的に、より効率のよい社会構造に変化させるために、それに適合的な教育方針が採用された。新たな体制に適応できた者は社会的な上昇を果たし、落ちこぼれた者は「自分らしさ」という自己正当化をしながら「やりたいこと」に奔走した。そして一部の者が、バックパッキングという自己を再生できる装置を「発見」し、しかもそれによって現代社会に適合的なアイデンティティを獲得できることを確信した。そして、社会的上昇を果たすために、今度はそれに熱中したのである。

このようなアイロニカルな帰結は、次の語りからもうかがえる。旅というやりたいことに専念しているバックパッカーの語りからは、自分らしさを最優先に追求するその姿とは裏腹に、放棄したはずの「自己実現」的価値観が強力に内面化されていることがわかる。彼らは、旅に出たからといってこの価値観から完全に解放されたわけではなかったのである。そのような屈折した心境を、あるバックパッカーは「ドロップアウト」と表現した。

> やっぱり日本では、大学、まあ、学校を出たら就職して、結婚して、子どもを育ててっていうのが人生の本道じゃないっすか。平凡で毎日「つまんねえ」っていっても、結局最後には、そいつが幸せで。やっぱり仕事を辞めて旅に出たとき、日本の社会からドロップアウトしたっていう気、めちゃくちゃしましたよ。仕事から解放されたというよりは、ドロップアウトって感じで。（コウイチ／1970年生まれ／男性。2004年10月、ラオス・ルアンパバーン）

このようなバックパッカーの「ドロップアウト」の苦悩は、旅に出ることを諌めた母親の言葉に「悩むっていうか、いろいろ考えたっていうか」と葛藤したガクの経験と重なり合うものだった。そして、このような価値観が旅のあいだも一貫して保持されていたのだとすれば、旅という実践はガクに自己変革の実感や自信の回復だけを付与したわけではなかった。このような実感の背後で、「やりたいこと」にこだわりつつ「右肩上がりの人生」を目指すという、彼が一度は完全拒否したはずの日本的な価値観を、ガクは無自覚のままに再肯定し、それに再服従していたのである。

6．放棄されない価値観

彼らは、バックパッキングによって望みどおり自己成長を実感し、新しい自己を獲得することができた。しかし彼らが帰依している日本社会の支配的な価値観からも解放されたのかというと、そうではない。彼らの自己変革は、彼らが内面化する「自己実現」的価値観にまで変更を及ぼすものではなかったのだ。

> 旅の期間は、やっぱ3カ月。それ以上、たとえば、沈没なんかしちゃうと、就職できなくなっちゃいますよ。俺、やっぱり日本の社会で生きていきたいんっすよ。まっとうっていうのか、会社に入って働くっていう。だから旅するのは3カ月が限度かなって。4月から働きたいっすから。（デグチ／1970年生まれ／男性。2004年10月、ラオス・ワンウィエン）

もちろんすべてのバックパッカーが、日本社会への復帰を前提にして旅に出たわけではない。将来の成長した自画像を計算することなく、ただ単純に旅がしたいから旅に出た者もたしかに存在している。しかしながらそのような者も、新たな生き方をみつけて、結局は自発的に日本社会への復帰を目指す場合がある。

そしてそのように決断した一部のバックパッカーは、日本社会への復帰の手段として、旅で獲得した資源の活用を試みるのだ。

> 就職活動は履歴書や面接でバックパッカー歴をしゃべりまくり、書きまくりましたよ。電話でもしゃべりまくったし。「君、すぐに辞めそうだね」って言われたけど「旅行はもう行き飽きたので3年は辞めません」っていったんですよ。履歴書には、旅行のことめっちゃ書きましたよ。だって大学卒業してからずっと空白じゃ、不自然でしょ。何年から何年までアフリカとか何年から何年まで南米とか。面接でも20分ぐらいずっと旅行の話ばっかり。向こうも興味あったみたいやし。で、どこどこではこんなことしたとか、どこへいったとか、ばっと話してましたよ。（ヤギ／1973年生まれ／男性。2005年6月、大阪）

オーストラリアで1年間のワーキング・ホリデーを経験したあと2年2カ月間のバックパッキングをして帰国したタク（1970年生まれ／男性）も、自身の就職活動の様子を次のように語っている。

> 塾に就職したとき、履歴書にも書いたよ。何も書かなかったら、空白になるからおかしいやん。（2005年6月、大阪）

私には、ヤギやタクの気持ちがよくわかる。というのも、5年間の自転車による世界一周旅行（1993年～1998年）を終えて帰国して人類学を学ぶために大学院を受験したときに（2000年）、私も、願書に旅の経験を詳細に記述したからである。旅を終えてある雑誌のインタビューを受けた時「面白かったなぁという、その一言」（高知県文化環境部文化環境政策課 1999：1）だった私の旅は、時間の経過とともに、「ユニークな私」をアピールする格好の資源へと変換されていた。私は、旅を単なる旅以上のものとして再解釈していたのである。

バックパッキングが想起させるパーソナル・イメージは「タフ」「自律的」「マルチカルチュラル」なアイデンティティである。旅をすることで、グローバル化時代にふさわしいパーソナリティが獲得できたと実感できることこそが、バックパッキングの大きな特徴だ。彼らは、そのことを熟知しているからこそ、履歴書や就職試験の面接の際に、積極的に旅物語を提示するのである。

もちろん、バックパッキングの経験が就職や受験にどれほどの効果があったのか、本人には知る由もない。まったく効果がなかった可能性も当然ある。しかし彼ら自身にとっては、旅をしたこと、履歴書や面接の際に旅の経験をアピールしたこと、そして就職や大学院に合格できたことは、まぎれもない事実である。すなわち、旅の経験が採用や受験に際して発揮した効果の大小は不問の

ままに、結果として企業に採用されたり合格したという事実によってのみ、旅の経験が正真正銘の資源であったと彼らは実感することができるのである。就職や受験に利用できたという実感が、旅が資源であったことの裏付けとなり、それを自らが確信することで、他者を説得することができるバックパッキングのサクセス・ストーリーが完成するのである。

ほとんどの日本人バックパッカーは、それが旅である限り、元の日本社会へ戻ってくる。すなわち、彼らの日本社会を離脱することから始まった旅は、自発的に日本社会への回帰を果たすことで終焉を迎える。しかしこの終わりは、新たな物語が始まる契機でもある。冒険心溢れるバックパッカーたちによって紡ぎ上げられた自己変革の実感と、「自己実現」的価値観が充満する社会において資源となりうる経験の獲得を目の当たりにしたバックパッカー予備軍が、旅に駆り立てられるからだ。このような欲望の模倣の円環を自動的に反復・再生産することでバックパッキングの自己変革と「自己実現」的価値観の充足機能は、日々、社会的事実化され、強化されているのである。バックパッキングという構造のなかで、斬新だが相似形の旅物語が産出され続けているのだ。

ただし、強調しておくが、すべてのバックパッカーが旅の経験を資源化しているわけではないし、すべてのバックパッカーが就職の際に自己の旅の経歴を披露しているわけでもない。そうではないが、日本人バックパッカーの調査において、ここで提示しているような経験を資源化する傾向は、けっして例外ではなかった。一部のバックパッカーは、自身の旅を旅以上の経験だと自負し、自らの経験の資源への転換可能性を肯定的にとらえる回路が、たしかに確認できるのだ。感動、喜び、驚き、スリルというような旅のすべての要素が自己成長に接続され、それが日本社会に再参入するための資源へ変換されていく。だからこそ彼らは旅の経験を一つのキャリアとして履歴書に書くことができるのである。

7．再肯定されるアイデンティティ

現代日本社会に生きづらさを覚え、日本的な「自己実現」からの解放を目指して旅に出たバックパッカーの一部は、結局は、自発的に、再びメインストリームの社会秩序へと回帰していった。旅で得た新しい自己と資源を利用して「自己実現」的価値観が充満している日本社会に再参入を試みるのである。バックパッキングという経験は、市場経済社会のなかで一味違った労働力として自らを売り込み、社会的上昇を目指すためには格好の「タフ」で「自律的」で「マルチカルチュラルラル」なアイデンティティと経験を彼らに付与するからである。ただ単に、日本社会で支配的な「自己実現」に生きづらさを覚えて葛藤・苦悩し、その末にドロップアウトして旅に出たというのならば、それは日本社会においては真の敗者を意味する。しかしドロップアウトを経て旅に出て成長した自分は、今まで以上に大きな自分へと変貌を遂げたのである。

あえていうならば、彼らのドロップアウトは、意図の有無は別にして、結果としてキャリアアップの一つの手段としての側面があった。つまり旅の果てにおいても、彼らの内面に宿る「自己実現」的価値観という部分に限っていえば変更はもたらされず、彼らは自らのアイデンティティの再確認をしたに過ぎなかったのである。それは、「バックパッキング」ということばが喚起するアドベンチャー・スピリットに満ち溢れたものではなく、まさに日本社会の王道を歩んでいくような価値観の再確認でもあった。

そしてここに新たな円環が完成する。ノイの知見は、旅でアイデンティティが変更され、それによってバックパッカーが再生産される過程を示していた。しかし本論文が示すのは、バックパッキングが、アイデンティティを変更する装置ではなく、既存の価値観を再確認する装置として機能し、それによってバックパッカーが再生産されていく回路である。これは、従来の価値観を拒否して自分らしさを追求した末に、従来の価値観に再包摂され、それを再肯定していくアイロニカルな帰結をも意味している【図３】。

彼らは旅がもたらした資源を携えて、日本社会での自己実現のさらなる上昇をあらためて目指す。そうすることで彼らは自らが真正のドロップアウトではなかったということを主張でき、経験

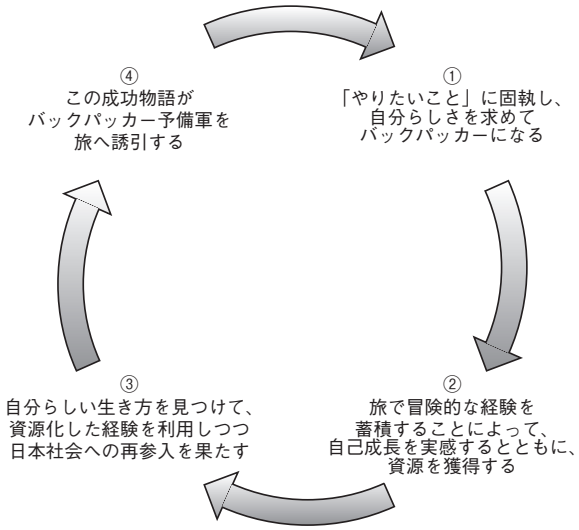

図 3　日本人バックパッカーの再生産サイクル

の真正性と旅に出た正当性を証明できる。そして旅という資源をもとにして日本社会に復帰できたことがバックパッカー予備軍を安心させ、彼らを日本社会から一時的に離脱させ、自己成長の実感を得るべく旅に向かわせる。このようにして、先達バックパッカーの成功体験を模倣することで自分らしさのサクセス・ストーリーを反復し、バックパッカーを再生産することで、バックパッキングの構造はより強固なものになっていく。

冒険的な旅であるバックパッキングは、冒険的であるがゆえに、その要素を最大限に活用され、「自己実現」的生き方の一つのバージョンとして、旅人に資源となりうる経験を付与する機能を担うようになってきている。冒険的な旅の経験から獲得される強い自己が、資本主義の「強い者が勝ち、弱い者が負ける」という資本主義のルールときわめて親和的だからである。この回路のなかで、日本社会で支配的な価値観からの解放を願って旅にでたバックパッカーの一部は、結局は、日本社会が強制する「自己実現」的価値観に自発的に服従し、かつて逃亡を試みた社会秩序へ再参入していくのである。

日本社会で強固に維持される価値観を拒否し、そこから逃走しようとする者を、再び日本社会へと回収していくメカニズムとプロセスは、社会秩序の強大な力を示すものであった。その際、「自分探し」に葛藤するバックパッカーに満足感や達成感という快感を付与し、自発的服従を促すことが、バックパッキングの巧妙な機能だったのである。見方をかえれば、バックパッカーは、グローバリゼーションという世界システムの変化を利用して、「自己実現」的価値観と共犯関係を結びながら、日本の社会構造の再生産に加担していたともいうことができる。すなわち、現代日本社会において、バックパッキングは、人々に日本的価値観を再確認させ、それに追従させる一つの装置として機能していたのである。

しかし、だからといってバックパッカーの実践に否定的な眼差しを向けるのは的外れである。そうではなく、彼らのアイデンティティの渇望感と、旅によってもたらされる彼らの充足感、そしてそれによって彼らが日本社会へと回帰していくときに見せるバイタリティにどれだけ近づけるかが重要であり、我々はそこに目を向けなければならない。なぜなら、彼らの実践の背後には、終身雇用や年功序列に代表される日本的経営から、それより格段に冷徹な新自由主義的な企業経営という社会構造の変化と、それに連動した個性重視の教育改革がまずあって、その結果としてなかば必然的に、彼らがバックパッキングへとプッシュされていくという回路が見えるからである。その意味で、現代日本社会におけるバックパッキングによる自分探しは、発見されるべくして発見された側面があり、それは単なる自己満足や自作自演ではない。また、バックパッキングという実践が、生きる意味について葛藤し自信を喪失していた者に、生きる希望を与え新たな活力を付与したことは、まぎれもない事実である。彼らがバックパッキングをとおして得た自信と確信は、彼らがこれから歩もうとする新しい人生のステージで、新たな地平を切り開く原動力になりうるのだ。つまりバックパッキングには、たとえそれが皆に相似形の経験を提供する商品化や構造化の過程にあったとしても、人々の生を活性化させる力がまぎれもなく備わっているのである。

さらにまた、日本人バックパッカーがみせた、一度は拒否したはずの「自己実現」的価値観が、バックパッキングという実践を経て再び彼らの内面に浮き出てくる様子は、まさしく山路のいう「蜉蝣」「陽炎」そのものである。アイデンティ

ティは、掴みどころがないものの、たしかにそこに「ある（見える）」という山路の実感は、きわめて「正しい」感覚だったのである。

付記

本論文は、筆者が2010年４月に京都大学に提出した博士論文「冒険的な旅から冒険的な生き方へ　―アジアにおける日本人バックパッカーの『自分探し』の軌跡から―」の一部に大幅な加筆修正をしたものである。

参考文献

Adler, Judith, 1985, Youth on the Road: Reflections on the History of Tramping. *Annals of Tourism Research,* 12(3): 335–354.

Boon, James, 1982, *Other Tribes Other Scribes*. Cambridge: CambridgeUniversity Press.

Cohen, Erik, 1972, TOWARD A SOCIOLOGY OF INTERNATIONAL TOURISM. *social research,* 39 (1): 165–182.

————, 1973, Nomads from Affluence Note on the Phenomenon of Drifter-Tourism. *International Journal of Comparative Sociology,* XIV: 89–103.

Desforges, Luke, 2000, TRAVELING THE WORLD Identity and Travel Biography. *Annals of Tourism Research,* 27(4): 926–945.

Elsrud, Torun, 2001, RISK CREATION IN TRAVELING Backpacker Adventure Narration. *Annals of Tourism Research,* 28(3): 597–617.

MacCannell, Dean, 1974, Staged Authenticity: Arrangements of Social Space in Tourist Settings. *American Journal of Sociology,* 79: 589–603.

Noy, Chaim, 2004 THIS TRIP REALLY CHANGE ME Backpackers' Narratives of Self-Change. *Annals of Tourism Research,* 31(1): 78–102.

Riley, J, Pamela, 1988, Road Culture of International Long-Term Budget Travelers. *Annals of Tourism Research,* 15(3): 313–328.

Uriely, Natan., Yonay, Yuval., Simchai, Dalit, 2002, BACKPACKING EXPERIENCES A Type and Form Analysis. *Annals of Tourism Research,* 29(2): 520–538.

Vogt, W, Jay, 1976, Wandering: Youth, and Travel Behavior. *Annals of Tourism Research,* 4(1): 25–41.

Wang, Ning, 2000, *TOURISM AND MODERNITY A Sociological Analysis.* Oxford, Pergamon.

石川准、2001「自己実現を支援する学校と学校カウンセリングをめぐる論点整理のために」『教育社会学研究』68：105–124、日本教育社会学会。

市川昭午、2002「90年代―教育システムの構造変動」『教育社会学研究』70：5–20、日本教育社会学会。

大野哲也、2007「商品化される『冒険』―アジアにおける日本人バックパッカーの『自分探し』の旅という経験―」『社会学評論』58(3)：268–285、日本社会学会。

————、2010「冒険的な旅から冒険的な生き方へ―アジアにおける日本人バックパッカーの『自分探し』の軌跡から―」博士論文、京都大学。

大村英昭、1997『日本人の心の習慣鎮めの文化論』NHKライブラリー。

久木元真吾、2003「『やりたいこと』という論理―フリーターの語りとその意図せざる帰結―」『ソシオロジ』48(2)：73–89、社会学研究会。

経済企画庁、1956『経済白書―日本経済の自立と近代化―』。

高知県文化環境部文化環境政策課、1999「WIND」『とさのかぜ』、1–6。

小杉礼子、2004（2003）『フリーターという生き方』勁草書房。

高橋歩、2005（2001）『Love & Free　世界の路上に落ちていた言葉』サンクチュアリ出版。

———、2006（2003）『Adventure Life』A-Works。

竹内洋、1995（1988）『選抜社会試験・昇進をめぐる〈加熱〉と〈冷却〉』株式会社メディアファクトリー。

———、2005『立身出世主義近代日本のロマンと欲望［増補版］』世界思想社。

武田徹、1999『流行人類学クロニクル』日経BP社。

ダイヤモンド・スチューデント友の会、1979『地球の歩き方２アメリカ』ダイヤモンド社。

中根千枝、1993（1967）『タテ社会の人間関係単一社会の理論』講談社現代新書。

速水健朗、2008『自分探しが止まらない』ソフトバンク新書。

三浦展、2005『下流社会新たな階層集団の出現』光文社新書。

山路勝彦、1998「蜉蝣の認同、先祖からの出奔　漢族でもなく、シラヤ族でもなく（１）」『台湾原住民研究』日本順益台湾原住民研究会、3：15–53。

山田昌弘、2004『希望格差社会―「負け組」の絶望感が日本を引き裂く』筑摩書房。

旅行人編集室、1996『旅行人ノート３メコンの国』旅行人。

Re-affirming Identity

Japanese backpackers in Asia and the consequence of their “self-seeking” travels

ABSTRACT

Many people in contemporary Japan face a situation wherein they ask themselves “Who am I?”. The search for self-identity has induced people, especially of the younger generation, to discover backpacking. An individual’s identity is formed through the process of differentiation with the “other” and backpacking, wherein one experiences various cultures for long periods of time, can be regarded as a social practice that constructs this identity. In the field of tourism studies, research on backpacking has repeatedly indicated that one’s identity can be transformed through the course of adventurous traveling. Assuming these processes, this paper introduces a case study of Japanese backpackers traveling in Asia. This paper explores the relation between backpacking and identity, especially focusing on the backpackers’ changing identities during travel and their “new life” after their travels.

Key Words: backpacking, identity, re-affirmation